

日本記者クラブ会報

第214号
1987年
12月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 1001
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話 五〇三―二七三二(代)

ニユースの発信基地に



企画委員長 細 谷 洋 一

暦はもう少しで……演歌の歌詞ではありませんが、一九八七年も残りわずかとなりました。この一年をふり返って企画委員会の活動を報告します。

報告に先立って、この五月に企画委員長になったばかりの私を助けて知恵と汗を流してくださいました、企画委員の方々と事務局のスタッフの方々に改めてお礼を申しあげます。

さて、今年も内外からたくさんのお客さまをお招きしました。記者会見と昼食会が合わせて五五回(十一月末現在)。海外からのお客さまは四人でした。

国、公賓はポーランドのヤルゼル

スキ国家評議会議長と、バキスタンのジュネジョ首相のお二人。例年より少なかったのは、総裁選という日本の国内政局を配慮してのことだと思います。

注目された海外からのお客さまには、前出のヤ議長のほか韓国の大統領候補の盧泰愚氏や、米国の著名な作家ハルバースタム氏、アイスランドの女性大統領フィンボガドチル女史らがありました。とりわけ、ヤ議長と盧氏の昼食会には、二百人を超す会員が出席してなかなかの盛況でした。

今年の特徴は、波乱の年を反映して研究会、勉強会がかつてなく活発

だったことです。

主なものは前企画委員長(藤村邦苗・フジテレビ常務)時代に企画され、五月からスタートした「日米関係」シリーズ。国内の経済関係や米国のシンクタンク所長、高名な弁護士らをゲストに招いてすでに二回を重ねました。

また、地価の異常な高騰が目立った折、九月からは「土地を考える」シリーズも始まり、これまでに四回の研究会を開きました。これは年内で終了の予定です。

例年八月は企画委員会も夏休みなのですが、今年は超伝導の第一人者、田中昭二東大教授を招いて研究会を開き、酷暑のなか百人以上の会員が汗をふきふき熱心にメモをとる光景が見られました。

こうした研究会、勉強会は企画委員の方々のご提案によるもので、会員の自己研鑽のためにも今後も続けていきたいと考えています。

現役記者の奮起を

ところで、半年間の企画委員長の経験から、来年へ向けての課題を少し考えてみたいと思います。

前企画委員長時代と比べて、記者会見場のスペースにも余裕ができましたし、記念品にシックなネクタイなどもそろいました。記者会見で会場からの質問が途絶えて、司会者が困惑することも少なくなりました。

しかし、活発に質問を飛ばすのは毎度、経験豊富な個人会員の方々が多く、現役記者は押されぎみです。ここは一つ、現役記者の奮起を促したいところです。

大風呂敷を広げようですが、私は日本記者クラブをTOKEYO発のニユースの発信基地にしたいと夢想しています。記者クラブでの内外の要人の会見の内容が、ビッグニュースとして全世界に打電されてこそ、日本記者クラブのプレスステージが大いに上がると考えています。

企画委員会は、来年も大いに知恵と汗を流すつもりです。会員諸氏のご支援をお願いいたします。

『クラブ賞』候補の推薦を

新年互礼会は一月二十一日

早くも十二月、内外情勢も庶民生活も、せわしない日が続く。

クラブが毎年、この季節になると取り組む仕事の一つは、「日本記者クラブ賞」の候補者推薦である。会報前号で推薦要領をお知らせしたところ、さっそく何人かの会員から心



「五輪に参加しない国は、それ自体で“敗北”です」
サマランチ I O C 会長昼食会 (11.24)

強い反響があった。

締め切りは来年一月三十一日で、まだ間があるが、できるだけ早めに多くの推薦が寄せられるよう、理事会は期待している。

いま一つの仕事は、新年互礼会の際に会員の皆さんに投票をお願いする「予想アンケート」の出題選び。この方は、企画委員の方々にジャンル別分担で、いろいろ知恵をしぼっていただいている。

来年の新年互礼会は一月二十一日(木)と決まった。ここで一年前の「予想アンケート」の投票結果が発表される。今度は例年と異なり、出題に一部取り消しがあったため、半端な九点満点で採点されるが、さて豪華特賞はどなたの手に?

交戦両国の大使招く

十一月のクラブ行事の柱になった

のは、ベリテイ米商務長官、サマランチ I O C 会長、堅山全民労連会長の三人を招いての昼食会、いずれもゲストから率直で内容のある話をしてもらい、好評だったようだ。

また、イラクのアリフファイ大使に続いてイランのアデリ大使と、交戦両国の駐日大使を呼んでの記者会見も、双方の厳しい対立点を浮き彫りにしてくれて、有益だった。

しかし、このあとに来日したイランのベラヤチ外相の記者会見は、直前になってキャンセルの申し出があり、ご迷惑をおかけした。

このほか、富野逗子市長の記者会見、インターナショナル・ヘラルド・トリビューン紙のヒューブナー社長、ビノクール編集長を囲む会、米スキヤデン・アープス法律事務所のプロム代表による「日米」シリーズ十二回目、などがあった。

ただ、米オクシデンタル石油のハマー会長の記者会見は、ご本人のモスクワ滞在が長引き、訪日見合わせとなったため、やむなく中止した。期待していた会員が多かっただけに残念だったが、次の機会にはぜひ実現させたい。

記録版の充実へ

記録版の充実を図るとの会報委員会の方針に沿って、パンゲマン西独経済相、盧泰愚韓国国民正党総裁、清水国土庁官房長の会見内容を、先日お届けした。追っかけ、富野逗子市長、米国人弁護士ザルム氏、大沢宇宙開発事業団理事長の分をお送りする予定。

さきに日本経済新聞社のご好意で導入した「日経テレコン」のデータベースに、従来の日経四紙、朝日新聞、ジャパン・タイムズのほか、新たに毎日新聞の記事が加わった。まだ当分は試験運用の形を続けるが、操作に慣れると大いに重宝する。ご利用をお勧めする。

最後に、年末・年始のクラブ施設のご利用についてだが、年末はレストランが二十八日(月)夜まで、ラウンジは二十九日(火)昼まで、また年始は五日(火)朝から、とさせていただきます。

年の暮れは、あちこちの忘年会でとかく不摂生になりがち、くれぐれもご自愛のうえ、よいお年を。

(事務局長 下田 進一)

新欧州事情 英独仏の旅から

日本に積極的役割を期待

友 田 錫

晩秋の欧州を、とんぼ返りするよう
して二度、訪れる機会があった。最初は
十月半ばのフランス。次は十一月初めロ
ンドンから西ベルリンへ。ほんの数時
間、壁を越えて東ベルリンにも足を
運んだ。ベルリン行きは日独センター開
所式の記念行事の一つ、第九回日欧会議
というシンポジウムに出席するのが日
的。フランスでは、もっぱら雨のバリで
旧知の外交官やジャーナリスト、政治家
と会うのに忙殺された。

というわけで、欧州の秋を満喫するに
はいささかせわしなかったが、「ポスト
I N F (中距離核戦力)」の不安に揺れる
欧州の空気をじかに吸えたのは、実をい
ってうれしかった。やはり新聞記者とい
う人種は、現場にいたるときが一番幸
せなのだ。

米ソのI N F全廃合意に欧州が不安を
おぼえている、ということは、新聞でも
読んだし、理屈ではわかっていた。だが

現地の人びととじかに話してみると、不
安な気持ちが生々しかった。西ドイツの
与党、キリスト教民主同盟のある幹部の
言葉だが、「いざ戦争の火ぶたが切られ
れば、私の家まで四十五分でソ連の戦車
がやってくる」と言われて、頭をがーん
となぐられるような衝撃をおぼえた。

米国への不信感も見てとれた。「欧州
の指導者たちに一番ショックだったのは、
一年前レイキャビクでレーガンとミ
ルバチョフが、欧州の頭越しにI N F撤
廃を決めようとしたことだった」——パ
リで会ったある政治家はこう述懐する。
フランスの有力紙で最近まで政治部長を
していたあるジャーナリストは、「米国
はやがて欧州から撤兵していくだろう」
と、かなり自信ありげに語っていた。

一九四〇年代末から冬眠していた欧州
の軍事同盟、「西欧同盟」(W E U)が十
月末に復活した。このように、欧州の独
自防衛構想が最近とみに台頭してきてい

る。その背景には、まさに「米国におい
てけぼりされた」不安があるのだった。
ポストI N Fへの不安、対米不信の強
まりとならんで、もう一つ欧州で人びと
の注意をひきつつあるのは「ドイツ問題」
だった。ひとことでは言え、西ドイツ
はどこに行くのか」という疑問だ。

西欧諸国のなかで、I N Fがなくなる
と最も不安を感じるの、東側と直接境
を接している最前線国家の西ドイツだ。
しかも戦術核兵器は、東西両ドイツに集
中のに配備されている。米国をはじめ他
の西欧諸国がよほど配慮しないと、西ド
イツは孤立感と絶望感を抱きかねない。

「いまのヨーロッパ(西欧のこと)にあると
思い定めているから心配ない。問題は、
社民党や緑の党だ」と、先のフランスの
政治家は言う。フォーゲル氏率いるいま
の社民党は、左傾化して支持率も落ちた
が、それでも二大政党の一方の雄であ
る。東ベルリンを訪れたときに会った東
ドイツのシンクタンク、政治経済研究所
の幹部は、西ドイツ社民党の東ドイツへ
の接近を「歴史的な出来事」と、最大級
の表現で評価していた。そういう東側か
らの誘惑を熟知しているだけに、欧州の
他の国々は、西ドイツから目が離せない
のだろう。

ただ、ことわっておくが欧州は、東西

両ドイツの統合は現実的にみてあり得な
いと確信している。こわいのは、西ドイ
ツが自己保全のために東ドイツとの関係
をもっと強めて、政治的に中立の色合い
を帯びることなのだ。

最後に、日欧会議で痛感したことをつ
けくわえておきたい。会議は政治、経
済、第三世界、先端技術、の四つのテー
マで議論したが、意外なことに、欧州側
のだけ一人として日欧貿易摩擦を口にす
るものがいなかった。むしろ、I N F合
意にあらわれた米ソ関係の流動化、株暴
落やドル下落など、世界経済への危機
感、全般的な米国の指導力の低下、とい
った問題で、「日本はどんな役割を果た
してくれるのか」「日本と欧州でどう協
力できるか」という観点の議論が支配
的だった。

日本では欧州を「貿易摩擦のうるさい
相手」としか見ない人が多いが、それは
間違っている。もっと前向きな関係を欧
州との間に築けるのではないか。そんな
印象を強く持った。



とよだ せき会員

サンケイ新聞社論説委
員 一九五八年東京新
聞社 六二年サンケイ新
聞入社 サイゴン特派
員 パリ支局長 政治
部編集委員 外信部長
編集局次長などを歴
六月から現職 日本記
者クラブ企画委員

とっておきの話

知らない「こと」の強味

柔道国際会議でケガの功名

渡辺

修



さて私は、ここで

この試合の模様をこ
と細かに書こうとい
うわけではないし、
また「とっておきの
話」があるわけでも
ない。ただ数多くの
取材苦勞話の中で、
どういうわけかこの時のパリ取材ほども鮮明に
記憶しているものがないので、披
露してみたいと思う。当時私は、特派員として西ベル
リンにいた。この年、つまり一九
六一年八月十三日に、東西ベルリ
ン境界線上に一夜にして「壁」が
構築され、戦後冷戦史上最もホッ
トなインシユーの一つ、ベルリン問
題が、一触即発の危機を迎えた。この事件を取材し、フォーローする
のが私の任務だった。しかしこの
危機もヤマ場を越え、ほっと一息
ついていた十一月末のある日、東
京のサンケイ新聞本社から取材指
令がきた。パリで開かれる第三回
世界柔道選手権大会と、同時平行
して行われる国際柔道連盟(IJF)F)総会とをカバーせよ、という。
たまたまパリ支局の取材上の都合
で、応援に出向くわけである。と
るものもとあえず、私は急拠ベ
ルリンからパリへ飛んだ。ところがパリは、私にとって生
まれて初めての土地だった。しか
も、フランス語はまるでチンプン
カンブン。オルリー空港に着くは
ずの飛行機が霧のため降りられ
ず、正反対のパリ北郊ブルジュ
空港に着き、迎えに来てくれるは
ずの人とは会えず、悪戦苦闘し
て、とにかくパリ市内に入った。
柔道世界選手権は十二月二日と三
日、ブローニュの森クーベルタ
ン体育館で開かれることは知って
いた。しかし私がまっ先にやらな
ければならなかった仕事は、一九
六四年東京オリンピックの正式競
技種目に採用された柔道を、どの
ような方法とルールで実施するか
を決める国際柔道連盟(IJF)
総会の内容を取材することだっ
た。試合前日の十二月一日にIJF
F総会が開かれるらしい、という
程度の情報しかない私は、何はと一九六一年(昭和三十六年)は
日本柔道にとって、忘れることの
できない、屈辱の年だった。年
も押しつまった十二月三日。パリ
のブローニュの森の南の一角、
クーベルタン記念体育館で行われ
た第三回世界柔道選手権大会で、
順当に勝ち進んだ日本の強豪選手
たちが、当時のヨーロッパの新
星、オランダのヘーシンク選手の
前に枕を並べて討死にし、まさか
と思われた優勝の栄冠をかつさら
われてしまったのである。は、逆にヘーシンクの鋭い攻めに
晒然とした。支え釣り込み足から
寝技にもちこまれた神永は、なす
すべもなく判定負けしてしまっ
た。古賀選手も敗れ、最後の期待
はただ一人、決勝戦の曾根六段に
集まった。だが悲願むなく、曾
根もまた寝技にもち込まれ、「け
さ固め」でワザありをとられてし
まった。「まるで鋼鉄の板を押しつけら
れたみたいで、どうにも動きよう
がなかった……」。試合後、曾根選
手は真っ赤な顔で悲痛な感想をも
らした。この試合を取材していた
私は、早速「技の柔道、力の柔道
に敗る……」といった記事を東京
に送ったものである。最も期待の大きかった神永五段
は、四回戦(準々決勝)で、この
二メートル近い巨漢ヘーシンクと
ぶつかった。神永の冴え技を期待
し息をのんで見守っていた観衆

もあれクーベルタン記念体育館に行つて調べてみようかと決心した。

地図を頼りに初めてのパリ地下鉄に乗り、体育館にたどり着いた。たまたま日本の柔道関係者がいたのでたずねてみると、IJFの会議は、パリ市をはさんでルーニユとは反対側の東のヴァンセンヌの森にある会議場でやり、すでに始まっているという。ただし会議は非公開で、新聞記者も中には入れない。ただ日本記者団には、午後四時からここクーベルタン体育館で会議内容のブリーフィングがあるのでここに来てほしい、とのことだった。

とにかく初めてのパリである。西も東も分からない。でもぼやぼやとムダな時間を費すわけにもいかず、ヴァンセンヌとやらに出かけてみるかと思い立ち、再び地下鉄に乗った。文字どおりパリの西の端から東の端まで、長い道のりだった。

IJFの会議はたしかに開かれていた。ドアはびったり閉じられ、委員と関係者以外は出入り

できない。しかたなくドアの外でぶらついていると、中から一人の外人が出てきた。「IJFのメンバーですか？」と英語でたずねると流ちょうな英語が返ってきた。「東京オリンピックでの競技方法はたつたいま決まった。無差別クラスをふくめた四階級重量制で、軽量級が六八キロ以下、中量級が」と中身をすっかり教えてくれた。そればかりか、耳につけていたイヤホンをはずして「どうぞこれでお聞きなさい。中の様子がぜんぶ分かるから……」。

オーストラリアの代表だということが、胸のIDカードで分かった。この親切なありがたい申し出のおかげで、会議のほぼ全容をつかんだ私は、ふと時計を見た。午後一時を少し回っている。いまから打電すれば、朝刊には十分間に合う。だがパリを知らない悲しさ。肝心の新聞電報を、どこで打てばいいのか分からない。とぼとぼ歩き出すと、会場の中から一人の日本人が出てきた。しめた、と思った。「日本の方ですね？ 私

はサンケイ新聞のこれこれというものですが、新聞電報はどこで打てるかご存知ではありませんか？」とたずねたら、「私もいまそこへ行くところです。よかったらご一緒にどうぞ」。

にこやかな笑顔で私を車に乗せてくれたこの紳士は、磯村尚徳と名乗った。当時のNHKパリ特派員だった。（これを縁に今日も親しく付き合わせていただいている）思いがけぬ幸運と、磯村氏の親切のおかげで、それから二時間後には、ヨーロッパ通りのプレス・ワイヤレス事務所から、オリンピック柔道関係の記事をすべて

打電し終えた。しかし不思議でな

らなかつたのは、この磯村氏、いったいどうやって会場へ入れたのか？疑問は直ちにとけた。フランス語の達人である磯村氏は、何とこの会議の司会団の一員であったのだ。もう一人、プレスワイヤレス事務所で、この関係の記事を打っていた人がいた。Y紙のバリ特派員である。聞いてみたら、支局の助手が会議で日本代表団の通

訳をしていたという……。

いずれにせよ、最初のヤマは越えた。まだ時間は間に合うので、クーベルタン体育館に行つてみた。記者会見場に着く前に、向うから一団の日本人が足早に歩いてきた。パリの日本人記者団だったことはいうまでもない。「いま発表がありました。内容は道々教えます」。いましがた送った記事通りだった。

知らない、ということほど強いものはない。フランス語が分からず、パリの土地カンが全くなかつたが故につかめた幸運、いやケガの功名だったのだろう。

夜、ホテルに東京から一通の電報が待っていた。「オリンピック柔道、朝刊十三版一面五段、最終版トップ。他紙を抜いた。ご苦労さま」……。

わたなべ おさむ 昭和二年東京出身。旧制東京高校、北大を経て慶大卒。二十七年時事新報入社後サンケイ新聞へ移り、ロンドン、ボン特派員、外信部長、欧州総局長を歴任。五十一年フジテレビへ。報道部長、国際部長、常務取締役。六十二年七月から関連米国現地法人フジサンケイ・コミュニケーションズ・インターナショナル会長。五十六年から五十九年まで日本記者クラブ理事。

株暴落 ニューヨーク

ワーキングプレス

経済担当のニューヨーク特派員として赴任して以来約三年になるが、十月十九日の株価大暴落に遭遇、取材できたことは記者冥利に尽き、自分の記者生活の中でも恐らく最も思い出深い出来事になるとの予感がある。

その日ニューヨーク市マンハッタン街の街角のニューススタンドでは、道行く人々がわれ先に夕刊紙「ニューヨーク・ポスト」「デーリー・ニューズ」などを買い求めていた。そこには「ブラッック・マンデー(暗黒の月曜日)」「パニック(恐慌)」「クラッシュ(崩壊)」といった衝撃的な見出しが躍っていた。

また繁華街タイムズスクエアにある米国の代表的な新聞社「ニューヨーク・タイムズ」本社でも、夜の午後十時ごろに発行される翌日の早刷りを手に入れようと長い列ができ、飛ぶような売れ行きが続いた。このようなことは赴任以来全くなかったことである。株価大暴落が米国民をいかに震かんとさせたかを示すほんの一コマに過ぎない。

朝刊早刷りに長蛇の列

倉沢章夫

ニューヨーク株価大暴落の予兆は昨年九月十一日にあった。ダウ工業株三〇種平均指数がこの日、前日引け値比約八六ドル安と史上最大の下げ幅を記録したのである。この時は、下げ率では一九三〇年代の大恐慌のきつかけとなった「暗黒の木曜日」といわれる二九年十月二十八日のそれには遠く及ばなかったが、これを上回る大暴落がいつやってくるもおかしくはない、との考えが頭の中に芽生えた。

さらに株価は今年に入って、異常な高騰を続けた。ダウ平均指数は今年初めに二、〇〇〇ドルを突破したあと史上最高値を更新し続け、八月にはついに二、七〇〇ドル台に達した。その主因は、金余り現象、つまり財テクの結果で、米国経済の実体を反映したものではなかった。

このころ取材先の米系、日系証券会社のアナリスト、トレーダーらと話をすると、株価は高騰を持続するとの強気な見通しが支配的だった。証券会社の人間が強気になるのは商売が当然といえるが、その理由が今一つ明確ではな

い。むしろ米国の財政、貿易両赤字は縮小の兆しさえもみせず、拡大する一方。また八五年のプラザ合

意以来の急激なドル安に伴い、輸入インフレ懸念が台頭、金利は徐々に反騰し始めていた。加えて近年盛んになったコンピュータによるプログラ

ム売買では、取引単位が大きいため、株価変動が激しくなる傾向がある。そして駄目を押しつけたのが経済政策運営をめぐる先進七か国(G7)、中でも米国と西独の確執だった。つまり株価が大暴落を演じる環境は整っていたというわけである。

日系証券会社が暴落のきつかけを作ったとのうわさがあるが、どの質問だった。日系証券の対米投資が引き揚げられたら株暴落が起きるのは必至。加えて円高・ドル安を背景に日本からの不動産投資ラッシュなど日本関連のニュースに事欠かないこのごろでもある。ありそうな話だが、今回に限って言えば、ウォール街では全くといっていいほど話題にならなかった。日本サイドの心配は取り越し苦労だったと思う。

ウォール街では何が起きても不思議ではない。例えば思いもよらない企業の大規模合併・買収などは日常茶飯事。再度の株暴落もあり得る。事実、エコノミストの中には悲観的な見通しも根強い。



「CRASH」「PANIC」が躍る米各紙写真 WWP

中国共産党大会

ワーキングプレス

中国取材という点、どんなイメージが一般的なのだろう。シルクロード物など、旅行取材は別として、社会主義中国の政治取材となると、まず党機関紙「人民日報」の行間を読む。党幹部の異動、言動で中の動向をうかがう。香港情報をもとめて分析する。一昔前まではそうだったし、今でもそれは重要だ。しかし、このほど開かれた第十三回党大会を振り返ると、中国も変わりつつあるな、そのいわゆる重要な仕事に変化し始めたな、としみじみ感じさせられる。

連日続いた「会見攻勢」

北京・人民大会堂を舞台に繰り広げられた党大会（十月二十五日～十一月一日）は、党の方針「改革・開放」路線を確認し、その推進を強く主張した大会だった。大会取材が初めて許可されたのは、もちろんその一環としてだ。といっても、開会式と閉会式がオープンになっただけで、途中の分科会審議や、中央委員選挙は非公開。それでも、大きな前進には違いないし、記者にとってはありがたい。

西側外交官も簡単には見れない保守派巨頭（といわれる）陳雲党中央顧問委主任の意外にくたびれた様子、党トップの総書記のイスから引きずり降ろされた胡耀邦政治局長の笑顔などを生で見ることが出来るのは、中国取材を続けるジャーナリストにとってゾクゾクする喜びだ。カメラマンは、開会式と閉会式の冒頭の数分間、中央のヒナ壇前に陣取ってレンズを向

けることができた。

上村 幸治

サービスもいきとどいたものだった。人民大会堂の南側にプレスセンターが設けられ、中では資料を無料でコピーしてくれるし、テレックス五台、ファクシミリ二台、国際電話を直接かけられる電話五台が用意された。党大会記者会見に、台湾の記者が登場し、歴史的な初質問をしたことがある。夕刊用に原稿を送

ろうとこのセンターに飛び込んだが、なんと一分ほどで電話が東京とつながり、感激したものである。支局から交換手呼んで東京につないでもらうと、十分や二十分は確実に待たされるからだ。話が少し遅れるが、中国の電話事情はまったくひどい。香港から入るとことさらそれを感じる。どうして、ここまで東京との連絡に苦勞しなければならぬのか、と

うらめしくさえなる。電話交換手の涙ぐましい苦勞を知っているから、口の悪いわれわれも、悪態はつけない。設備に問題があるのだ。もっとも、

今回は交換手の女性に「党大会の取材をしている日本の記者だ」と説明すると、驚いたことにすぐつながった。これも、大会の恩恵の一つといえようか。

今回は大会開・閉会式を開放しただけでなく、期間中、毎日記者会見を開いた。会見はすべて中国語だが、英語にも通訳するので（これは通常の会見と同じ）、少々極端な方言が混じっていても、問題は

ない。

外国人シャットアウトの要人居住区、中南海も参観させてくれた。サービスと素直にとって良いのかもしれない。もっとも、毎日会見を聞いたからといって、必要な情報が簡単に得られるというものでもない。そこは西側社会と同じだ。中国側の「会見攻勢」とでもいうものに対応するため、記者の側にも新たな取材体制を整える必要が生じている。今後の課題だろう。中国の底流の変化をみるために、なお努力が必要なのは変わらないのである。



記者団に囲まれる趙紫陽総書記(11.2) 写真 WWP

かみから こうじ 一九八〇年毎日新聞入社 大阪本社 東京本社 外信部を経て 本年五月から香港特派員

三億円・名画盗難事件

ワーキングプレス

フランスの名画盗難・強奪事件に続く、東京・有楽町の三菱銀行有楽町支店三億三千万円強奪事件の取材は、従来の事件経過とは全く異質の形で進展。東京とパリを舞台にした国際犯罪は、予想外の展開となって次々に表面化しているだけに、二か月近い長期取材を振り返ると、実に短く感じられる。「毛皮泥棒で捕えた男がフランスの盗難名画を日本で売りさばいていた」。こんな漠然とした情報が取材開始の端緒だった。男が藤曲信一(四七)で盗難名画がコロ作「夕暮れ」と分かったものの、その先が一步も進まない。仏捜査当局と捜査共助を結んだ警視庁は、一切ノコメントで、藤曲を捕まえたことさえ公表しなかった。

いきおい、取材先は美術館、画廊へと向けられ、慣れない美術全集と一日中取り組むという日課が続いた。コロ作「夕暮れ」は、ICPO(国際刑事警察機構)の重要絵画盗難手配には載っておらず、いつ、どこで盗まれたのか、そして、どのような図柄の絵なのか、

ガード堅い「日仏合同捜査」

か、という基本的な問題がクリアされていなかったからだ。やっとコロ作盗難絵画五点の全容をつかんだものの、現場が遠いフランスでは取材もおぼつかない。パリ支局と協力して記事掲載となったのは、最初の情報から二週間もかかったほど。ところが、この情報を契機に、状況がガラリと変わった。

記事を見た各方面の読者からの情報が相次ぎ、コロ作の絵画だけでなく、三年前、パリ・マルモッタン美術館で強奪されたモネの代表作「印象―日の出」を含む、名画九点の売り込み工作も日本国内で行われていた事実が明らかに。日仏間の盗難・強奪絵画密売事件へと発展した。この間、警察サイドの発表は皆無に近く、独自の取材が主力を占めた。

その取材のまっただ中、三億三

松島

徹

千万円強奪事件が飛び込んだ。しかも、犯人は、藤曲と親しく付き合いフランス人たち。名画密売と三億三千万円強奪が、同じ人脈の中で結びついたのだ。しかも、実行犯のフランス人は、事件直後に国外逃亡、さらに、後になって犯人と判明したフランス人一人も、パリ市内で、今年七月に射殺されていたという出来事まで加わり、事件は日仏間で一層の広がりを見せた。

ところが、実行犯が国外に逃亡しているだけに、取材は難航。フランス人と付き合いのある暴力団関係者、ブローカー、通訳など日本人関係者を捜し出し、捜査員と同時進行の取材。断片的な情報を、時差八時間のパリ支局とキャッチボールしながら全容をつかむ、という毎日が続いた。

事件は、まだ終わりを告げていない。大きな峠を越えた程度で、「モネの強奪絵画はどこに」「三億三千

万円強奪事件には国内の人間がからんでいないのか」――など、数多くの問題が残っている。

この事件は、大きく様変わりしている現代版事件の典型といえる。現場は国境に関係なく広がる。一方、日本人、外人が複雑にからみ、さらに連鎖的に他の事件と結びつくケースだった。

それだけに、取材の範囲は従来の経験を越え、苦心の連続、いや毎日が勉強のような取材活動に思えた。

(十一月二十六日記)

まつしま 上おる 一九七二年読売新聞入社 横濱支局を経て 社会部 本年五月から警視庁クラブ



「おしなれ」も話題になったパレストラン警視正 (11.10) 写真 読売新聞

ク ラ ブ ゲ ス ト

富野暉一郎 逗子市長



当選後初の市議会開催の前日、池子問題の本質について話したい、という市長の申し出を受けての会見となった。

「五回のリコールの中でも市民はシラケずあきらめず、史上最高の投票率（七六・一四％）だった。市民の自己決定権を市民が運動の中で知ったからで、これが保証されれば政治への関心も責任も保証される」。今後は対米説得と世論喚起で、米軍住宅建設問題の政治解決を日さしていく、と。

池子問題の本質的部分として次の五点をあげた。①政治課題として登場してきた自然保護②安全保障（サドン・デス）と緑（スロー・デス）の問題③国と地方自治体の新しい関係④教科書、民主主義の有効性⑤戦後民主主義の持つ強さ。「自然保護運動は、遠・珍・貴から、近くて並で雑なものへ」と

一つの曲がり角を曲がり、政治課題になり首長までとる段階になった。その延長線上で、国家にはサドン・デス（急激な死）だけからでなくスロー・デス（緩慢な死）からも、人々の生命と安全を保障することが求められてきている。そして、「安保と緑の綱引き」になった時には、代替措置を構じれる例が譲るべきで、池子の場合には「安保の方に欧州型オープン・コミュニティなど対応の可能性がある」というわけである。

イデオロギーや政党にしばられない、豊かな社会の是非々論ともいえるべき、市長の「カルチャーとしての政治論」は、わが国の民主主義と政治への問いかけとして興味深い。が、いい意味であろうが悪い意味であろうが、身勝手(?)という印象が付きまとうのはなぜだろうか。政治はそうした身勝手同士のコンプロマイズやレスリングに過ぎないのだからか。

これは昭和十九年生まれの市長の理料的キャラクターとも関係しているようだ。今後、世論に訴える場合には、この点での考慮が必要かも。ともかく、市長は明年二月に訪米する。【二月五日（木） 記者会見 司会 井上好道委員 出席 六四人】
イラク・イラン大使シリーズ
一九八〇年九月に始まったイイ戦争、クラブではその年の十月に、当時の駐日

イラク、イラン両大使を招き記者会見を行っている。

七年余を経過し、米戦艦によるトゥエートのタンカー護衛、国連安保理の調停案、イランのソ連傾斜など緊迫と停戦への模索が交錯する中、二度目の両国大使の記者会見を次のように行った。

八〇年当時、アルジャッフ・イラク大使は「アルジェ協定による正当な領土と水域を回復するための、自衛権にもとづく戦いである」と主張した。一方、サーレフホウ・イラン大使は「アルジェ協定に不満なら国際司法裁判所に提訴すべきだ」と反論し、「非宗教集団・パース党政権は、自らの悪政による国内の不人気と動揺をばん回しようと、イランへ介入し、ベルンチャワの憲兵になる」と企んでいる」と非難した。このように開戦当初は、国境線を定めたアルジェ協定（一九七五年）をめぐる議論が目立ったが、今回は両大使とも、もうこの協定にはまったく言及しなかった。それだけ憎悪と悪感情が相方にたぎり、理性から一層、遠ざかったということなのか。
ラシード・M・S・アルリアファイ駐日イラク大使

昨年十月着任。石油相など主要閣僚歴任の大物大使である。戦端を開いたのはイランであると経緯を説明後、安保理調停案については「あくまで一括したもの



として考えるべきで、修正は一切認められない。領土の一部や捕虜を与えたまま話し合いに入れば「相手に切り札を与えることになる」というわけだ。イランは公式に態度を明らかにしていないが、イラクは正式に調停案の受け入れを表明したとはいいが、「国連決議は月のように昇り、いつの間にか沈むことが多い」とも。

善意の国々と各機関がイランに対し制裁措置をとるべきだとし、「日本もいずれ米国が達した結論に至ることを期待している」と。【二月五日（木） 記者会見 司会 佐藤睦委員 通訳 横田謙 出席 六九人】

セイエド・M・H・アデリ駐日イラン大使
今年七月に着任。高校、大学で経済学を教えた後、駐カナダ臨時大使、外務省経済局長、外相顧問を経て駐日大使に。戦時下の大抜てき人事といえるかもしれない。

政治解決に努力してくれている日本や西ドイツの立場も考え、みんなが本心に真剣なのかどうかを試してみたいと思

ク ラ ブ ゲ ス ト



C・ウィリアム・ベリティ米商務長官

い、「安保理決議を、イエスとはいわなかったが、今回初めて拒絶しなかった」。侵略者の発表と停戦を同時に実現させるのが第一ステップであり、他の部分については議論するのは時間のムダという立場である。

「日本が安保理の議長国である間に、侵略者が誰であるかが公表されることを期待している」と。

I J P C 問題については「撤退を話す段階ではないし、イラン側当業者の同意なしにはそれは不可能。両国の友情のシンボルといえるこの施設への攻撃に対しては、日本も抗議するようかねてから要求している」。

きれいな英語で雄弁である。冒頭の発言は三分ばかり、「どこからでもどうぞ」とばかりにはとんどの時間を質疑応答に当てた。が、この国の孤立感と関係しているのか、少壮大使のたび重なる笑いが気になった。「二月九日(月) 記者会見 司会佐藤睦委員 通訳 福島安紀子 出席 六三人」



父はマ元帥の産業問題担当顧問だった。鉄鋼業の解体と比国移転案に反対した。日本の戦後復興のために資するようにして残すべきとの考えであった。日本製鉄誕生の際には、永野氏から株券一号を贈られた。終生、彼はそれを宝物にした。私自身もアームコ社のトップとして、日本への技術移転の経験を持ち、その近代化と関わってきた。

スピーチ冒頭で、このように述べ、父子二代の真の友人の立場から、日本がその富と政治力に見合った役割を担うことを求め、「リーダーシップを分かち合うための相互責任(Mutual Responsibility in Shared Leadership)時代」を強調した。

特に大幅黒字が世界経済を不穏にし、株式、債権市場のトラブルの原因になっているとして、「不均衡是正を最優先課題にするよう竹下総理に要請した」と。また、日本企業が輸出価格を値下げすること

で、円高の半分を相殺しており、「日本製品は外国で広くダンピングのおそれあり」とも。

質問に答え、公共事業開放問題については、「帰国後閣僚レベルでレビューし、通商法を順守する上で必要なあらゆる措置を考えることになろう。が、まだ前進の希望もあるだろうし、結論が出たとは思わない。変化までには時間が必要であろう。しかし、前進がないなら、議会が報復に出ないようにするのに相当苦勞することになろう」。「二月二〇日(金) 昼食会 司会 鈴木幸夫大委員 通訳 横田謙 富永正之 出席 二〇五人」

この日、東京で初刷りの新聞を携え、ビノクル編集長とともに現れた。パリに本拠を置いて、ロンドン、チューリヒ、ハーグ、マルセイユ、ローマ、マイアミ、香港、シンガポールと拠点を拡張し、いよいよ東京へ。パリから一ページ三分で電送されてきて、午前九時に印刷にのるので、丸内では朝のうちに読める。現在、欧州で一三万、アジアで三万、中近東、アフリカその他が二万で合計一八万部。東京は三千部だが、これを一、二年で倍増させたい、と。読者層は「国籍や地理的条件だけにしぼられることのない、教育・所得水準の高い国際人



なので、当該国の英字新聞などは競合しない」とはいうが、出席者の中にはやはり英字紙関係者が目立った。「二月二〇日(金) 懇談会 司会 佐野直樹氏 通訳 R・スターリング 出席 三四人」

J・アントニオ・サマランチ I O C 会長 出席者の関心は、来年九月の夏季五輪への北朝鮮参加問題に集中した。一九八一年のソウル開催決定以来、七回訪韓、政治問題の壁を崩すべく努めている。今回も中国で北朝鮮側と接触してきた。会長にはロンドン・タイムズと米NBCの記者が同行していた。

二日前、広州で北朝鮮の五輪委員長と会った。回答は年末までという話だった。かつて中国と台湾の問題を解決した経験もあるので、I O C としては肯定的に考えている。「五輪家族の自由往来は大事なポイントで、北朝鮮が五種目受け入れを決定しても、こうした点でI O C の提案が認められないなら、五種目開催のオファーを撤回せざるを得ない」「準備をするのにむずかしい五種目

クラブゲスト



をオフアールしているが、時間が迫っているので懸念していることを、北朝鮮側には伝えた。一月十七日が重要な日になると思う」「ある国が参加しなかったことは過去にもある。もし、参加しない国があれば、参加しないこと自体が敗北である」

最後に、司会者が会長にお礼をいって、「若い頃、バルセロナのボクシングチャンピオンで、打たれ強い」との定評だったそうですから、大いに期待したいと思います。〔一月二十四日「水」 委員会 役員兼委員 補 読 米倉謙子 出席 九四人〕

豎山利文 全労連会長

「既存のナショナルセンターがすべて解散またはその方向を決定したことは画期的なこと、ここまでできた労働戦線統一のウネリは前進はあっても後退はない」

この昼食会の一週間前、十一月二十日、全日本民間労働組合連合会

〔連合〕が誕生した。民間単産六二組織、約五六〇万人加盟の民間統一ナショナルセンターの出發である。三年後には総評も解散することを決定し、いよいよ次は「官民統一」のステップとなる。

統一に至るまでの歴史的経過に触れた後、会長は「連合」の基本戦略として次の二点を強調した。①強力なシンクタンクをつくり労働側としての政策立案能力を飛躍的に向上させ、社会的要請にも応えていく②政治路線を明確にして、政権交代可能な政治勢力結果を促進させる。

①については「社会、民社、公明、社民連の若手スタッフにも研究に加わってもらい、そうした中で政策的合意の形成を期待していく。②に関しては、「社民の歴史的和解が先決で、次に公明を加えた展開という段階論は分かるが、既存野党の連合だけでは自民に代わる力として十分でなく、新しい政治勢力の掘り起こしが必要」と。

マルクス・レーニン主義をめぐり分裂し、高度成長以降は既得権にしばられ、



「時代に振り回され、革新性を失ってきたが、『連合』によって時代を先取りし革新性を回復したい」と同席の山田精吾事務局長。

「国際化、高齢化、技術革新、情報化の中で、終身雇用、年功序列、企業別組合も変革を迫られている。特定のイデオロギー、経験、価値で対応することの不可能な時代に入っている。こうした個性のニーズにどう応えるかが、政治にも労働運動にも企業経営にも求められている。これが会長の基本認識なら、多様化、個性化への「対処療法的」傾向の強い「統一」といえよう。会長自身もこの日、新しい支持基盤掘り起こしのために「企業別組合の短所を克服し、社会的役割を自覚した労働運動の活動領域拡大が必要で、そこへかきたてていくような「ロマン」がほしい」というような発言をしたが、「官民統一」に際しても、やはりこれが問題になるのではないだろうか。〔一月二十七日（金） 委員会 林正男 委員 出席 五三人〕

ジョセフ・H・フロム米弁護士

八五〇人の弁護士を有し、M&A（企業合併・買収）を得意とする米スキヤデ・アープスのパートナーである。

一九七四年、同法律事務所はすでに二人のM&A専門の弁護士を擁していた。当時まだ米国の投資銀行でも専門家



を置いていなかった。が、この一三年間で、急速に取引が増加した。この日はいわば「M&A入門」、米国における現状と日米関係の将来との関連で話を聞いた。

米国ではM&Aを①友好的買収と②敵対的買収に分けている。①は役員会の議を経て株主に提示される取引で、②は役員会を経ず直接株主に提示される取引だ。一般的な欧米企業の場合は②に近いものが多く、日本企業の場合は規模も小さく、例外は別として①が多い。

「米政府は外国企業による対米投資を歓迎している」「株暴落で一時沈静したが、ここ数週間案件が増えている。が、やはり株式市場が安定するか否かに、今後の動向はかかる。継続案件は別にして新規のものには、議会に異論がないわけでない。が、議員というのは「関連した利益を代表してモノをいってもらおうと思えば、どんなことでもいってもらえるもの」とあくまでクルールである。〔二月三〇日（月） 日米関係「シリーズ」委員会 石丸和久委員 通訳 矢野智恵子 出席 四八人〕

（玄）

スタジオ訪問

関西テレビ放送

「ニュースな夕方」

女性の視点で
社会を見る

じ時間帯で、タレントを使ったニュース解説番組を放送していた。本音でニュースを語ろうというものだったが、「今度は女性の本音を」と考えたと言う。

スタートに当たって二十二人の女性を各界から選んだ。弁護士、医師、学者、作家、彫刻家、建築家、ジャーナリスト、デザイナー、スポーツ選手、タレントなど。年齢は二十二歳から五十八歳まで。それぞれの分野で活躍している経験豊かな女性ばかり。

そのうち毎回三、四人が出演する。司会役の桑原征平アナウンサーと、アシスタント役の片山三喜子アナウンサーを交えて、ひとつのニュース・情報について語り合う。

「どんな私見を言ってほしい。ただし、解説だけはほしくないようにと、お願いしています」

テーマは、事前に聞いたゲストの意見も参考にして決める。このテーマならこのゲスト、という選び方は避けている。取材をした日(十一月十四日)のテーマは、発足したばかりの竹下総理の「気づくばり人事」だった。ゲストは四人。自然科学者の森下郁子さん、弁護士の平野鷹子さん、サンケイ新聞記者の細見三英子さん、タレントの木原光知子さん。

午後四時、ゲストが集まるとディレク

ターが、その日のテーマと想定される大まかな流れを説明する。もともと「私、そんなこと言わないわよ」の一言で、タイムテーブルは無視されることがほとんど。

「必要に応じて、VTRや中継も入れるつもりです。ただ、準備をしすぎると生番組の良さが死んでしまう。いまのテレビは準備をしすぎています。それよりも、真剣にしゃべっているゲストの顔の表情を大切にしたい」と梁さん。

控室では、スタッフを加えた雑談が賑やかに始まっている。リハーサルはしない。スタジオに入っても、笑い声が絶えることはない。司会の桑原アナが、軽妙な語りでリラックスした雰囲気を作り出す。

「本番では、僕はしゃべらないほうがいいんです。オマエは黙ってみんなから頭を叩かれてほしいんだ、と言われていきます」と桑原さん。

その桑原さんが、閣僚を各派閥別に紹介。竹下さんの気づくばり具合を説明して、番組は始まった。

「女性閣僚がいらないのはなぜかしら」「適当な人がいないんだから、仕方がないんじゃないの」というやりとりから始まり、女性議員の話題へ、そして木原さんがかつて立候補を勧められたという話へ。さらに根回し社会、政治的リーダーン

ップへと話題は広がっていく。最後には、引退を表明したばかりの江川選手が急拠話題に登場、各人が職業人としての引き際の話をしたがら終了した。

梁さんは言う。

「結論を出す必要はないんです。本音を通じて、それぞれのゲストの人生がチャリとでも見えれば、それで良いと思っています。ところが、司会者を含めて、スタッフはどうしてもキチンとまとめようとしてしまう。この点、作り手側の意識を変えていくことが、これからの課題ですね」

トーク番組の成否は語り手にかかっている。関西の女性は本音でしか話せない」と梁さんは言うが、スタジオでの会話の明るさは、ブラウン管を通して十分に伝わっているはずだ。(河野 聡)



竹下首相の「気づくばり人事」がこの日のテーマ

ピジョンボックス

▼オーストラリア大使館では、日本語と英語に堪能な広報担当の職員を募集しています。

ジャーナリストの経験があり、日本とオーストラリアの報道関係に詳しく、また管理職の経験のある方を望んでいます。

応募者は、日英両文の履歴書に写真を

添付し、至急、左記までご郵送ください。
〒108 港区三田二一〇一四

在日オーストラリア大使館人事部

詳細は、広報・武田(四五三〇二五)までお問い合わせください。

(オーストラリア大使館 武田吉朗)

▼カナダ大使館では、メディア・広報紙の担当者を集めています。

マスコミまたは広報活動経験者で、日

英両語に堪能な、社交性および創意性のある方を求めています。

ご関心のある方は、英文履歴書に写真を添え、給与希望額を記して、左記へお申し込みください。

締め切りは十二月十五日です。

〒107 港区赤坂七三三三八

在日カナダ大使館人事部

TEL 四〇八一二二〇一
(カナダ大使館 吉田健正)

クラブ訪問者

11月5日 シヤヒン・アル

パイ ジュムフリエツト紙編集主幹(トルコ)

寄贈書

新聞協会報合本(61年) 日本新聞協会
日本の財政革命 経済懇話会 森本亮

展示会の招待券

平野光男会員から「87いけばなTODAY」「北欧の美術」「西武美術館版画大賞展」「北欧クラフトの今日」を、毎日新聞社から「棟方志功展」の招待券をご惠贈いただきました。お礼申しあげます。

○囲碁の会

十一月二十一日、四月以来初めて快晴の例会日となった。二十三人の参加で総対局数五五は雨降りの日とさしたる差はない。

できのよかったのは吉沢正也六段、浅野道彦五段、近藤敬、河田稷の両四段、内川芳美二段、竹内善昭初段。西山二段は九局をこなして敢闘賞。

今回は暮れも押し詰まった十二月二十六日、本年最後の土曜日。第六回の大軒杯争奪戦。参加費二千元。初めての方も歓迎、事務局へ電話でお申し込みを。

プロフィール

◇個人D会員



紹介 会合

2日▽日経OB大学
教授の会(鶴田卓彦
会員)▽クレイン
カルガリ市長記者会
見(カナダ大使館
D・マクレラン会員)
4日▽論説委員懇談
会(NHK 多湖實之会員)▽電波七
社会(読売 土井共成会員) 6日▽
全国政懇協議会・懇親会(共同 藤井
寛会員)▽「現代をとおく教育キーワー
ド」編集者会議(時事 小池行正会員)
▽ワシントン会 元ワシントン特派員
の家族会(時事 小関折哉会員) 9
日▽政経文化クラブ十周年記念パ
ーティー(奈良 中川雅裕会員) 10日▽
粕谷茂、瓦力両大臣の就任を祝う会
(TBS 青木徹郎会員)▽ブラウン
豪州観光相記者会見(豪州大使館 武
田吉朗会員)▽独立U局企画開発会議
(サンテレビ 相馬英樹会員) 13日
▽販売労務担当者全国会議・懇親会(協
会 村上重美会員)▽読売国際漫画大
賞審査会(読売 後藤昌彦会員) 14
日▽第三回教育奨励賞表彰式(時事
原野和夫会員) 16日▽九州五社会
(長崎 中野広会員)▽ロスAT&T
ベル研究所長を囲む会(AT&T W
・ムーディー会員) 17日▽日豪放送人

会議(民放連 泉長人会員) 18日▽
F1日本グランプリ記念号「COUNT
DOWN」出版記念パーティー(日刊
スポーツ 三浦勝男会員) 19日▽東
都会 都新聞OBの集い(宮村文雄会
員)▽ウォーカー ウェールズ担当記
者会見(英国大使館 春海二郎会員)
20日▽中南米記者研修参加者お別れ会
(安延久夫会員)▽九州国立博物館
建設推進「座談会 綱木亨弘元文相、
江上波夫元東大教授、福田繁日本博物
館協会会長他(西日本 石崎憲司会員)
▽日本ジャーナリスト懇話会(佐久間
央会員)▽スロージョーニ日本友好基金事務
総長との懇談会(協会 宝子山幸充会
員) 25日▽加晩会 元バンクーバー
特派員、外交官、商社員の集い(宮本敏
治会員) 26日▽足田桂一郎さんを送
る夕べ(朝日 神塚明弘会員) 27日
▽対談 内田健三法政大学教授、川村
充夫お茶の水ゼミナール理事長(熊日
神山宗興会員)▽開局三十周年特別番
組「大白夜」試写、記者発表(東海テ
レビ 土井哲夫会員) 28日▽クレ
ール会 元パリ特派員の家族会(日経
村瀬満男会員) 30日▽サンケイ新聞
外信部OB会(川中子真会員)

(会員がクラブ施設を利用して行った主な会
合です。十一月の総数は一三四回でした)

会議報告

第150回企画委員会(11・4 大会議室)

司会をした委員から行事報告の後、十
二月のクラブゲストについて協議した。
外相、蔵相、通産相、政調会長らを招く
よう折衝することにした。また、明年の
新年互礼会で実施する「63年予想アンケ
ート」の出題割り当てを決め、次回委員
会で設問十問を決めることにした。

出席 細谷委員長。浅井、佐野、山岸、
広瀬、井上、佐藤、高橋、河野、
林、平田、堤、有馬、ヒルシャ
ーの各委員。

第43回施設運営委員会(11・9 第2会議室)

大会議室、記者会見室の壁紙張り替え
工事を、十二月下旬に行うことを了承し
た。貴賓室のソファのクッション取り替
え、レストランのイス修理について事務
局から報告、承認した。

出席 後藤、佐川、原、和田、小松原、
宮地、甲斐原、野田の各委員。

第86回会報委員会(11・11 第2会議室)

十一月号の反省と意見交換の後、十二
月号、一月号の編集について協議した。
明年の「写真回廊」短文執筆者を上田健
一、村尾清一、森野朗郎の各氏に依頼す
ることを決めた。

出席 深川委員長。三好、松井、東郷の
各委員。

第123回会員資格委員会(11・12 第2会議室)

十二月一日付の人退会を審議し、理事
会へ答申した。

出席 松下、小池、播谷、樋口、金子、
山本、亀垣、埜邑、長竹の各委員。

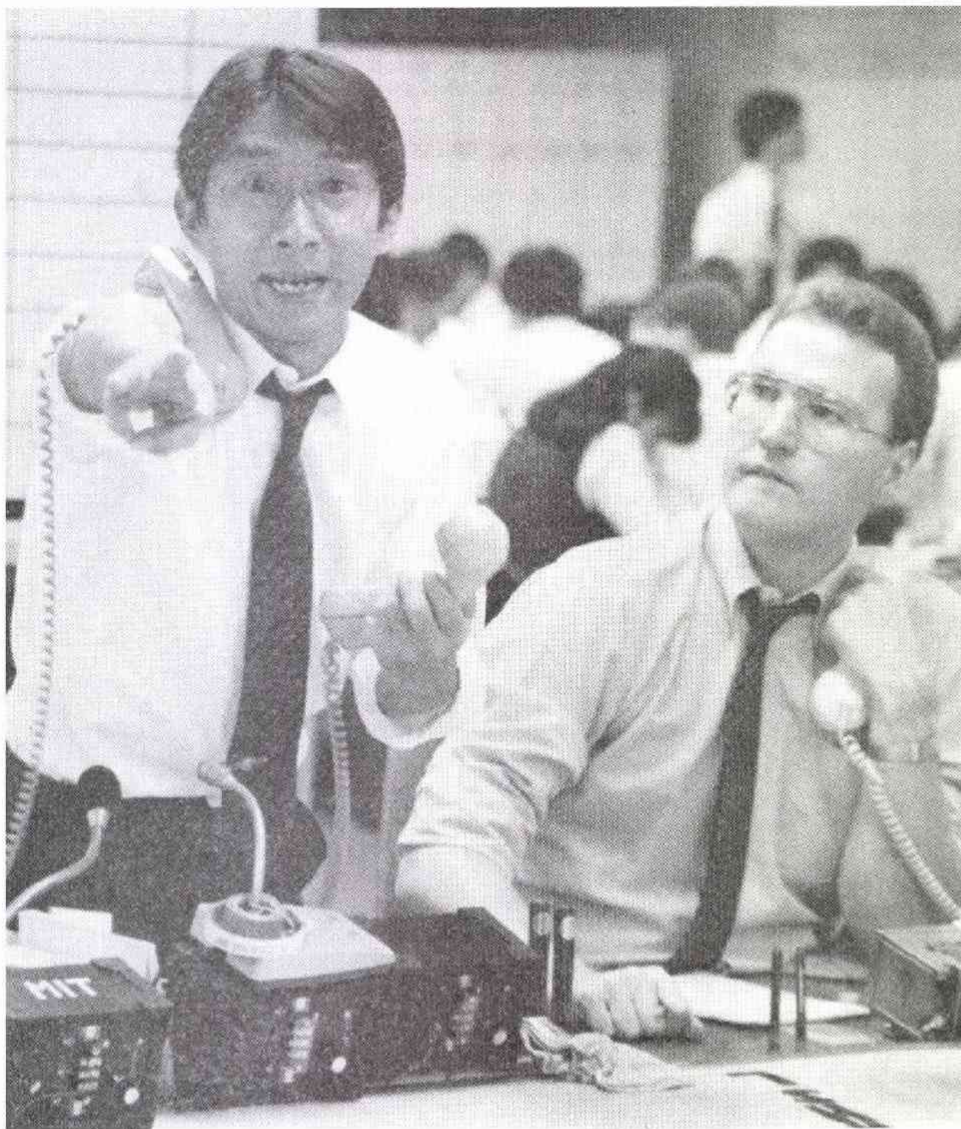
おわび―三会見が中止に

十一月は三つの会見が中止になり、ご
迷惑をかけてしまった。オクシデンタル
石油のハマー会長は、クレムリンの動き
もあってモスクワ滞在を延長し訪日を中
止した。リー・シェンロン・シンガポール
商工相は滞日日程を短縮して帰国したた
めであった。最後のペラヤチ・イラン外相
は、当日になっての最悪の取り消し
であった。外務省へイラン側から「中止」
の知らせがあったのが、前日午後八時
頃、中近東二課からクラブへの連絡は当
日午前十時であった。自民党本部での安
倍・ペラヤチ会談に同席の恩田中近東ア
フリカ局長、アデリ大使を通じギリギリ
まで折衝したが、結果的にダメ。午後、
事情説明にきた大使館の広報担当は「前
夜から外相の気分はよくなく、今日の安
倍会談が長びき、会見の時間がなくな
り、ご迷惑をかけた」と。

写真部

写真 三上貞幸

(AP通信写真部 一九六八年入社 七九年に成田闘争の写真で『世界報道写真』グランプリを受賞)



金融大国・ニッポン

自由世界のGNPの三割を占める米国、残りの七割にドルを流してまで世界経済を回転させる力はなくなってきた。寄る年波である。そこで「黄金の国・ジパング」が国際金融革命の波に乗って登場、カネの売り買いとしての「外国為替取引」はいよいよもって商売大繁昌、為替ディーラーは花形職業となってきた。外国為替取引の仕組みは、売買の主体である銀行が外国為替ブローカー(上田ハローなど八社)に売買注文を出し、ブローカーは内外の売買注文を瞬時にして仲介、巨額の取引を効率的、円滑にする役割を果たしている。

この写真はハローのドル・円直物デスク。立っている御仁は「ユア三本」(三百万ドルの売り)と絶叫しているところ。ユアは売り、マインは買い、指一本は百万ドルだ。隣の外国人は世界主要為替市場との直通電話で売買注文を受けているリンクマン。その興奮したデスクのふんいきは殺気だっている。

本年度上期の円・ドルの一月平均出来高は三千二百六十六億ドル(三年前の三倍)、時間外取引を入れると約四千億ドル。その他通貨との取引も約一千億ドル。金融大国日本の象徴である。

(桑田 琢磨)

記録版のバックナンバーがあります

今年左記のように計六冊の記録版を発行いたしました。まだ余部がありますので、ご希望の方はクラブ事務局へお申し出ください。

二四号 食管改革こそ農村活性化への道(叶芳和国民経済研究協会理事長) 二一世紀に向けて合理的な稲作経営を支援する(石川弘農水省事務次官)

二五号 コメ問題の解決は農業イノベーションの中で(武田邦太郎武田新農政研究所長)

二六号 日米ともにコースを切り変えるとき(G・R・バックカード ジョンズ・ホプキンス大学ライシャワーセンター所長) ゴルバチョフ政権下の文化状況(水野忠夫早稲田大学教授)

二七号 米国の競争力弱体化で世界経済は調整過程へ(J・S・リード シティコープ会長) 避けねばならぬ金融不況(吉富勝経企庁経済研究所長)

二八号 ペレストロイカの旗手たち(佐野真毎日新聞外信部長) 日米関係の再構築を(大前研一マッキンゼー日本支社長)

二九号 貿易不均衡是正は多国間協議の場を通じて(M・パンゲマン西ドイツ経済相) 盧泰愚韓国民正党総裁昼食会の質疑から 最近の地価高騰と対策(清水達雄国土庁官房長)

「日本記者クラブ賞」のご推薦を

「日本記者クラブ賞」の候補者をご推薦ください。会員およびプレス会員に属する方々が候補有資格者です。推薦手続等詳細については、事務局へお問い合わせください。

『写真回廊』の新執筆者決まる

「自由な発想でモノが書いてとても楽しかったですよ」。今年一年間『写真回廊』の短文を担当していた林芳典、深谷憲一、桑田琢磨の三会員の共通した感想です。

各社写真部の協力を得て連載中の『写真回廊』は、明年一月で五年目を迎えます。写真記者ご自慢の傑作や力作と、ベテラン記者の練達の短文とでつくっている同ページは、今年も毎号話題となりました。

一月号からは毎日新聞出身の上田健一、読売新聞の村尾清一、共同通信出身の森野朔郎の三会員に筆をとっていただくことになりました。引き続きご愛読ください。

年末年始休業のお知らせ

クラブルームは十二月二十九日(火)正午で閉室し、新年は一月五日(火)午前十時から平常通り開室いたします。事務局もクラブルーム同様、十二月二十九日午後から一月四日まで休ませていただきます。

なお、レストランは十二月二十八日(月)夜の部まで営業し、二十九日から一月四日まで休ませていただきます。

十二月一日現在の会員状況 法人会員 一四三社 基本会員 六一六人 個人会員 一、三八七人 法人・個人賛助会員 七五社 二三七人 特別賛助会員 七四人 名誉会員 一六人 計 二二八社 二、三三〇人

計報 新井賢一会員(個人D)が、十一月十八日胃ガンのため、土肥良造会員(個人D)が、十二月一日心不全のため逝去されました。謹んで両会員の冥福をお祈りいたします。

十二月の行事 (7日現在)

- 15日(火) 午後2時~3時30分 研究会「土地を考える」(V) 坪井東三井不動産会長
 - 23日(水) 午後2時~3時30分 研究会「土地を考える」(VI) 田中啓一日本大学教授
- 一月の行事

- 6日(水) 午後5時~6時30分 「88経済見通し」吉富勝経企庁経済研究所長
- 7日(木) 午後2時~3時30分 「88経済見通し」鈴木淑夫日銀金融研究所長
- 8日(金) 午後2時~3時30分 「88経済見通し」田中直毅経済評論家
- 11日(月) 午後3時~4時30分 「88経済見通し」黒澤洋日本興業銀行副頭取
- 21日(木) 午後6時~8時 新年五礼会員懇親会

会員のみなさま良いお年をお迎えください。

事務局一同

会報委員長 深川 誠

委員 林 利隆 三好崇一 松井 章 東郷茂彦
連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三一二七二二